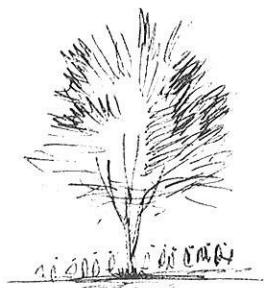


# 光の子



No.66 1996. 5. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい（ペテロの第1の手紙第4章10節）



「こいのぼり」

え・中島英子

## 母恋し

百千鳥仏を闇にかこみけり

落ちさうになって跳びけり恋雀

夕星や半ば乾きし燕の巢

覗きゆく戒壇院の蜂の穴

まみどりの直なるものへ今年竹

菜の花やひとりは膝のぬくもらず

蚊帳の環の鳴りしは昔母恋し

伊藤 通明 （『白桃』主宰）

# 主の名によって語り行え

コロサイの信徒への手紙 第3章17節

そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

理事長 福島 勲

本年度の標語として上の標題を掲げたが、これはキリスト者倫理の根本をなすものである。

われわれは子どものときから、嘘つきは泥棒のはじまりだと言って嫉られてきた。子の格言めいた言葉に照らしてみれば、今日、至るところに大泥棒が横行している。

嘘つきは詩人のはじまりと言った人がいる（手島兼輔、新潮社「ギリシャ」）

有名なホメロスの叙事詩イリアス・オデッセウスは、トロイ戦争をうたっているが、これは歴史的事実ではない。ホメロスの創作である。

おおそフィクションなる小説は嘘で固められているが、この嘘が許され賞賛される。読者は事実でないことを知りながら、泣いたり、笑ったり、感動したり励まされして嘘を楽しんでいる。

クレテ人はいつも嘘をつくとき、クレテの予言者が言うとき聖書にある。（テトス一・十二）

いつも嘘をついていると分かっているならば、それは嘘にはならない。誰も真実として受けないのだから嘘の被害を受けることはない。嘘は本当と入り混じり合っていてこそ嘘なのである。

現実には、利益や名声などが介在

して虚言が語られ、悪事が行われる。嘘も方便とか言って、嘘が安易に乱用される。

方便とは仏教用語である。

巧みに虚言を弄して佛の救いの正道に導くと言うことだが、果たしてこのような嘘が許されようか。

イエスを捕らえようとした人々から守ろうとして、弟子のペテロは剣を抜いた。だがイエスはこれを許さなかった。（マタイ二六・五二）

剣を用いる者は剣によって滅ぶと言われたことを、暴力否定から一歩踏み込んで考えると、キリスト者の意に添わないことで身の安全など求めないということでもあろう。

神が人間の嘘で守られるなどとは考えられないことである。

主の名によって語る、また行うということは、キリストの御意に従って語り行うということであり、キリストの名を汚すことのない様に、キリストの名があがめられることを願っていることである。

しかし、キリストに従うことは、いかに困難なことであろうか。十字架を負うて従えと命ぜられる。

キリストに従うのは望ましいが、このような重荷や苦難を受けることは避けたいのが本音である。

使徒パウロは、神の律法と肉の律

法との板挟みのあわれな自分を告白し、霊肉相克する姿を描いている（ローマ七・二五）

誰でも悪を犯す可能性は避けられない。神に背を向けた途端に悪魔はわが心に忍び込む。

IQ（知能指数九〇～一〇〇くらいで、身体は健康な者が、悪事を働く率が高いといわれる。しかしこれらは単純悪だが更にIQの高いエリートの犯す知能犯は、単なる知的な道徳観や理性だけでは制御できない。さて、ここまできて、暫し佇んでしまふ。信仰は人を完全主義者に追い込んで、業に対して手も足も出ない状態に陥らせてしまふ。

ある注解者はこの聖句を註して、キリスト者の倫理の基本的なものであり、祈りをもって行うよう義務づけるものであるといっている。

落ち込んだ業への意欲を引き上げてくれるものは、祈りであり、また信仰である。

ここで思い出し改めて耳を傾ける言葉がある。「神を愛して、己が欲するままに行え」（アウグスチヌス）と、大胆に罪を犯し、大胆に悔い改めよ（ルター）である。

神を仰いでことをなし、誤りを恐れて無為に終わることなく誤れば卒真に悔いる大切さを知らされる。

## トムソーヤたちの朝 終

日本キリスト教団東大宮教会  
永 野 三 恵

早春、一雨ごとに土が黒く、柔らかになり、水仙、チューリップ、ヒヤシンスが色とりどりに春を告げてくれる。その後は、競うかのようにな、花が咲き始める。神の創造のみ業の素晴らしさが目に見える形で示されるときでもある。

春は人間の営みで言えば、別れと出発の季節といえるだろう。

教会学校も、この春三名の高校生を送り出した。真面目な八木橋君は、自分の希望を貫くためもう一年勉強することになった。光の子どもの家の福島君は、スズキ自動車に就職し、浜松に勤務地が決まった。大森さんは、特技を生かした縫製工場へ就職した。ふたりの出発の会が三月末に光の子どもの家で開かれた。

不安と期待の交錯した面持ちでい

たふたりに、菅原さんが言われた言葉が印象的だった。「君たちは、こんなにたくさんの人たちから励ましを頂いた。こんなに多くの人たちの想いの中で出発していくことが出来る子どもが、どれだけいるだろうか。これから君たちは施設の子どもというのではなく、自分の名前と自信を持って歩んで欲しい」と。目には涙が光っていた。

落ち着いてきたふたりの様子を見ると、彼らも嵐のような時代があり、そこを乗り越えるには、職員の方々の祈りと、日夜を問わず全身全霊で養育された、その結果の賜物だと思う。恐れることなく歩んで欲しい。どんな時代にも主が共にいて下さり、励まし慰めて下さることを信じて。

教会学校は、今年度大人と合同礼拝で復活日を祝った。主の家族として、老も若きも幼い者も共に礼拝を守ることが出来るのは嬉しい。子どもたちのハリのある伸びやかな讃美歌を歌う声が響いてくる。子どもたちは、私たち大人にとって、希望と生命に満ちた宝物だ。

そうした子ども時代が過ぎると、今、私が直面している中・高生の悩みと迷いの時代へ突入していく。まさに疾風怒涛の時代ともいえよう。

大人の思いや願いを振り切るよう

に、彼らは自分の狭い考えに基づいて突っ走っていく。信頼で結ばれているからと大人の思いは、覆され、想像だにしない行動をしてくれる。成長過程のひとつだと解つていても、私たちの心は揺さぶられる。

三月末、夜中の十二時を回った頃、玄関のチャイムが鳴った。「今頃誰？」と、不安に思い扉を開けると、いつもは滅法元気のよい山手君がしょんぼり立っている。

「どうしたの？入って、入って」と声をかけると、もっそり入ってきた。「叱られたから頭にきて、家を飛び出してきた・・・」とボソツと言う。

「無事でよかった」と、ひとしきり話を聞く。気持ちが少し収まったところで、「先生方、寝ないで心配してられるから、ここにいと電話するね。」と、光の子どもの家に伝える。案の定「そちらに行つてくれてよかった」と、ひどく恐縮しお詫び言葉を頂く。

光の子どもの家の子どもたちが、東大宮教会へ通うようになり十年余の月日がたった。

子どもたちが成長の過程で、いろいろな問題にぶつかった時、「教会へ行こう」「〇〇さんの所へ行こう」と思える関係が出来て欲しいと、職

員の方に言われた。

私たち、教会学校の教師の言葉など、何も心にとめていないような彼らでも、その心の思いを晴らすために、夜中に、体力に任せ、三時間余りも自転車で行き走って、辿り着いた・・・やっと、そうした関係が少しづつ出来てきているのだ。

家庭で、思春期の子どもがひとり居るだけで、家族は気を遣う。光の子どもの家では、今三分の二がその時期にきている。同世代の子どもが居るといことは、麻疹のようにイライラが感染する始末の悪い場合もある。

でも、どんな時でも出来るだけ、彼らの心に沿っていききたい。毎週教会学校で語られる言葉が、いつの日か、力を持って一人一人の魂に生きて働くことを教師は願っている。

今年度も三〇名のトムソーヤたちが、様々な心の軌跡を描きながら成長していく様子を見守っていききたい。桜の花の薄いピンクの花びらが、ヒラヒラ舞う中を歩いて行くのが私は好きだ。その春、誕生日を迎えた私に、家族がカードをくれた。

「娘たちが巣立ってしまっても、いつも沢山の子どもに囲まれているお母さん。これからも、みんなにニコニコ優しいお母さんでいてね」と。

## チビチビ

二年ぐらい前だったろうか、まるでねずみの様な小さい猫が、私の家族に加わった。

学校に勤める息子が、生徒たちから捨て猫を押しつけられてきたらしいのである。雨にぬれて余りにもみすばらしい形の小動物は、最初はとうてい猫には見えず、ただうずくまっているだけで、蒸し暑い夏を乗り切れるとは思えなかった。しかし家内は、この目も開いていない小動物を、自分の手のひらに受け取って、大切に育てた。デザイン用の小さい筆の先に牛乳をしみこませ、少しづつ口に運んでやって、やつの事で子猫は生命を保つ事が出来た。そんなわけで彼女の手のひらの中が、膝の上で、この猫に与えられた最初の安住の場所であった。

その頃、家には他に八匹のやつと目の開いた子猫たちがいた。これらの猫は母猫がついていたので、大して手はかからず順調に育ちつつあった。後からの参入者は特別に手を加えなければならなかった。そして、それが最も小さかったものだから、チビチビと名付けられた。単なるチ

ビでなく、ピアニシモ・フォルテシモなどと同じ様な意味でのチビチビなのである。

チビチビは次第と成長するのだが、啼き声だけは、体に似合わず大声で、品のないものであった。そしてよく食べた。彼の姿を後から見ると、よたよたするような歩き方、体つきで、腹だけが大きく横にふくらんでいた。それもそのはずで、他の猫たちと一緒に餌をもらうのだが、自分のものだけでは気が済まず、他の猫を押しのけて横取りするのである。しまいには、チビチビが一緒だと他の猫は腰を引いてしまつて、充分に食べられない様な状態になっていた。何ヶ月かたつと、体の大きさは他の数匹の猫とは逆転し、子猫の中で最も大きく、毛艶も最も立派になっていた。

しかし、体は堂々と立派になってたくましいのだが、食べることに対する執念と、大きくて品のない啼き声は相変わらずであった。冷蔵庫から牛乳パックを取り出そうとすると、逸早くこれに気付いて、ギャーギャー啼くのである。ときどきサービスにカンヅメのペットフードをやるも

のだから、すっかり味をしめてしまつて、何でもかんでもカンヅメを開けようとすると例によってギャーギャーである。この啼き声は常識を超えていた。こんな訳でチビチビのがめつさには、みんなあきれ果てて叱るより笑い出してしまふ程であった。

ところでつい先日、私は斉藤茂吉の歌を読んでみた。そこで大発見をしたのである。

けだものは食べ物恋ひて

啼き居たり

何といふやさしさぞこれは

この歌の「けだもの」の部分に「チビチビ」を入れ替えれば、まさにピッタリである。この歌に出会った時、私はこれに引きつけられて、この先へ読み進むことが出来なくなつてしまった。チビチビにたけだものが歌われているからではない。

「何といふやさしさぞこれは」の部分である。斉藤茂吉であれば「やさしさ」は現代語に於ける「やさしさ」ではない筈だ。古語に於ける「やさし」でなくてはならないだろう。私は、本当に衝撃を受けた。

実は、このチビチビの凄さじいば

一八年間一緒に暮らしてきた猫が死んだ。南米のバグアイに出張していたとき、妻からファックスが舞い込んだ「・今日レオをタンポポ病院に入院させてきました・・出来る限りのことをします。生あるもの

とは、いつか別れの時が来るのは致し方ないことではありますが、レオのいた場所の空

・・」そして、筆者の帰宅を待ちきれず、その朝に自宅

山形大学医学部教授

仙道 富士郎

## 別れ

学者もどきのつづき ②

最後は絶対に私の腕の中で決心しています・・という妻の願いも空しく、机の下に身を隠して死んでいった。

そして私はといえば、いまだ死後硬直の残っているレオを抱きながら、いつまでも嗚咽を止めることが出来なかった。

猫が死んでから二週間たったが、妻はいまだに立ち直っていない。一週目にレオがよくお邪魔していた近所のご夫婦を招いて会食をした。気

持ちに区切りをつけたと思ったこともある。しかし、それはそんなに容易ではないことを思い知らされている。

筆者は忙しく飛び回っている間は忘れていたことが出来るが、妻は一日中そのことと向き合っていないければならず、筆者が帰宅するとホッとしているようだ。そして、二人でいる時には、お互いに以前よりも優しく対している自分たちを見い出している。日頃はさっぱり音沙汰のない四人の子どもたち（五番目のアメリカにいる子ともうじき卒業で忙しく、影響を心配して教えていない）からも次々に電話がかかってきて、私たちが気落ちしているのではないかと心配してくれる。私からして、この原稿はさっぱり進まない。一行書いてはレオのことを思いだし、筆が止まってしまう。脳動脈硬化が進んで情動過多になっていることは否めないが、それにしても、猫の死がこんなに大きな陰を落とそうとは思っても見なかったことである。

ここ一、二年はとてつもなく忙しく、ただ、走ってきたように思う。仕事も回ってこないようでは仕方がない、有り難いことだと自分に言い聞かせてきた。ほとんど唯一の最終目標は、いい仕事をして世界的な

ジャーナルに多くの論文を発表することに絞られ、それ以外の価値は、無意識のうちに切り捨てられてきたのだと思う。このままではかなわなという思いがつのる。

しかし、ふと気がついてみると、もう六十歳はすぐそこに迫っており、軌道修正を試みようとしても、それは到底かなえられそうにない。今このひととき、段々に静かになっていく自分の心を見つめていると、レオの死は、あまり肩を怒らせずに、疲れたらベースをスローダウンして歩いて行くことを私に教えてくれていたのかも知れないと思ったりする。

彼女の死に至る過程は、今考えるととても自然の摂理にかなっていたように思う。数年前からときどき布団にオネショをするようになり次第にその頻度が高くなっていった。最近ではあまりもの頻繁さに妻も悲鳴を上げるようになっていた。

ひとりの老人の介護をするつもりになりなさいなどと、何もしない私は勝手なことを言っていたが、恐らくレオの体力は次第に弱ってきて、向かいの家の庭のオシッコ場まで行けないようになっていたのだろうと思う。最後は尿毒症を起こしたという獣医の見立てであったが、その死に至るこの数年の過程は、ゆっくり

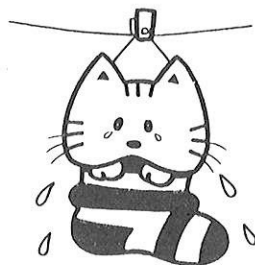
県立高校美術教師 中島 陸雄

かりのストリートな部分を、私の家内は非常に愛していたのである。動物の持っている悲しい一直線の表現を、むしろにいとおしんでいるのである。得体の知れない小さな魂を大事に大事に育て上げ、一応猫らしくなってきたチビチビが、小さかった頃と全く変わらないあのガメツさ、他の事は一切おかまいなしで、自分だけを考えて、本能的な要求のままに生きている。凄く猫だ。

けだものは食べ物恋ひて

啼き居たり

何といふやさしさぞこれは 参った、参った。私はチビチビのことを考え、けだものを連想し、そして人間を思った。人間は多少の知恵があるからけだもの様なストリートな表現はしないが、生きとし生けるものの宿命的な悲しさやけなげさはその本質の中に持っているのではないかと思うのである。



としていて、しかし、確実に徐々にその速度が速まり、最後の到達点に死であつたように思える。

十八年共に生活し、心を通わせた友であつて見れば、そんなに容易に悲しみを乗り越えられるわけもあるまい。

しばらくは妻と二人でレオのことを思い出すことだろう。そして、猫が教えてくれた優しさを持ち続けることが出来ればと、思う。

## ご報告

六月八日、第三回光の子どもの家大バザーは、好天に恵まれ盛大に楽しく行われました。

このバザーの収益金五十万円は、社会福祉法人光の子どもの家にご寄付いたしました。

全国からの品物のご提供や、当日は朝早くから、地域や静岡横浜、東京などから七十数名の方々のご奉仕など、心から感謝してご報告申し上げます。

一九九六年六月十五日

バザー実行委員会

金子 嘉男  
梅沢 美保  
田中 郁夫

# プリズム

子どもたちの季節

仙道家

新年度がはじまり、子どもたちもひとつづつ学年が上がりました。

三月で退職した鈴木保母、白石指導員に代わって藤本曜子保母、村上勇指導員が加わりました。他に十一年もの間一緒に暮らしをつづけてきた坂巻保母も退職して、最小限の子どもたちの入れ替えもあり、七名の子どもたちとの暮らしになりました。和田環も、まだまだ体は小さいけれど高学年の五年生になりました。まだ学年を入れていない名札を見た竹花保母に「早く学年を入れてあげて」と何度も言われてしまいました。そうでないと低学年に間違えられてしまうからでしょう。

新学期第一日目。帰ってきた環に、「先生誰だった？」と聞くと、「分かんない。」新しく原道小学校にいらした先生のです。

そして、数日が過ぎ、宿題を持って帰るようになりました。

そんなある日、環が帰宅するなり、「宿題やろう！」と、元気にダイニングルームにかけ込んできました。

目を輝かせて国語の宿題の本を読む環の姿の向こうに、確実な上向きの出会いをして下さった新しい担任の先生の姿が見える思いでした。

そんな出会いに応えようとする環の意気込みもひとと伝わってきます。その数日後、先生からの連絡帳に、「五年生になり、環は努力することを覚え、がんばっています。」

これまでとはうってかわり学校の充実が家での暮らしに転移して、日を重ねるごとに確実に変化していく環です。

さあ私も負けないで、伴走し応援していきます。

池田 祐子



原田家日記

一祈り

四月二〇日。「見かけで人を判断しない。」そう言いつつ育てた。ツルツルのブラウス、丈の短いジャンパー、そして茶髪。無事高校を卒業し、この春社会人となった兒子。彼女の「見かけ」にひとつひとつ口をはさむ。「見かけ」の大事な社会で生きる。

「誰とでもいい友人に、自分からなるんだよ」と言いつつ、出来た友人を見ると心は、穏やかではない。異性だった。いつまでも手放せない想いが社会人を「家」に引き留めている。その間に何が出来る、という訳ではないのだが。「ミシンが上手だっけほめられた」と会社より帰宅。四月二五日。自分のおやつのみならず私の「お茶の時間」にどこからかトコトコと現れ同席するみーちゃん。相変わらずおやつ好き同士、「ひとつちよーだい」と一本指を立てる。



「半分ね」「ちよっとだけちよーだい！」と覚えてた言葉でにこやかに交渉。ごはんの分、お腹をあげてね。

五月八日。幼い日を語れる・そんな月日を重ねて思春期の子どものちがそばにいる。どこでボタンをかけ違えたのか、高校生活のスタートが切れない。同じところをグルグル回り疲れていく。なすすべもない私たち。確かなことは「自分自身」で立ち返らなければ、まっすぐな方向に気付かなければダメなこと。その方向を示せる家でありたい。そんなことを思いつつ、今日も彼は遅い帰宅。ひとり遅い食卓に着く。「オレ、米研いどくよ」今の彼に出来る精いっぱい表現なのかも知れない。

子どもたちのいろいろな「時」を受けとめていく。

竹花 信恵

河のほとり

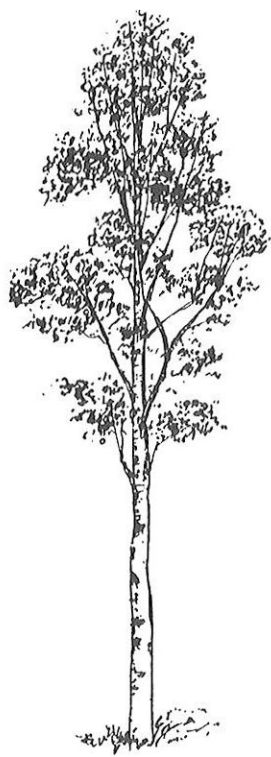
旗井の家

高校の陸上部でがんばると決心をして入学した嬉。これから先ずっと走り続け、大学に進学し箱根駅伝に出場できたらいいな、と、夢をふくらませ、その夢に向かって第一歩を踏み出した。彼ならば夢に限りなく近づくであろう、本当に箱根の山を走ってくれるかも知れない・そんな期待を周囲に与えるほど彼は輝いていた。

入った高校の陸上部に勇んで行く、「何だその髪の毛は、陸上をやりたいなら髪を切ってこい」教師の一言が夢を壊した。

せっかくの夢を髪の毛ぐらいのことであきらめないよう誰もが説得したが、彼の意志は変わらなかった。

一度ダメが出るとなかなか起き上がれず、もう一度歩き出すのに時間



のかかる彼は、全てに嫌気がさして投げやりな生活へと急激に傾いていった。怠学、夜遊び・あんなに輝いていた瞳は上を見ることがなくうつむく日々が四・五月と続いた。

母親ならば「何を甘えている！義務教育ではないのだから行きたくないなら辞めなさい！」と、一喝し放り出していかなくても知れない。しかし、母ではない身のもどかしさ、彼を放り出すことは出来なかった。

私がまだ彼に対して出会った責任、関わった義務を果たしていなかったから・。母ならば彼がいくつになってもどこに行っても母であるという事実はついて回り消えることはない。死ぬまで母として彼の責めを負うのだらう。彼と私は、ここにいるという事実が関わりをもたすのだ。彼はここを出ていったら、法的にも社会的にも何の保障もなく孤立無援で生きていかなければならない。

親との機能のちがいは一面無力であることをあからさまにする。

彼を何とか高校を卒業させ、社会へ出ていくための技術や知識、がんばる力を出来るだけ持たせていくこと、これが私の責任だと再確認させられている。

彼は他の部に入って自慢の髪の毛をなびかせている。そして徐々に落ち着いた生活に戻りつつある。

いつまで続くか分からない『担当者』としての関わりを許されて可能な限り続けていきたい。倉沢 智子

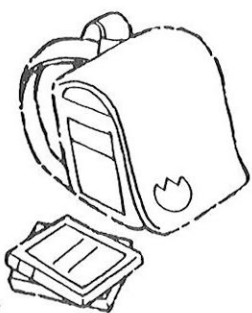
光の中で

佐藤家

職員の退職という理由から、たくさん移動があり、ここ佐藤家も新しいメンバーで再スタートを切ることにになりました。気持ちも新たに、たくさん可能性のあることを楽しみに生活を始めています。

さて、色とりどりの花を眺めながらの散歩が楽しい時期になりました。

この春、辰慈君が小学校に入学しました。毎朝、六年生の班長さんが、ゆっくり大股で歩いてくれる後ろから、一生懸命小走りに付いて行っています。まるで彼の気持ちのように、ランドセルが、その小さな背中からずり落ちそうです。



入学式の前日、つい「明日から小学生だね。しっかりね。」と声掛けしてしまつたところ、辰慈君は、「ぼく、まだ字、うまくかけないよ。」と涙ぐんでしまつたのでした。「いいんだよ。字なんか巧く書けなくたって。」と大急ぎで訂正しましたが、一回、口から出てしまつた言葉と傷つけてしまつた心は、消すことは出来ません。彼が、どれだけ不安な気持ちでいるかは、少し考えればわかることだったのに。

自転車を押しながら、彼と一緒に登校していても、その表情は曇りがちです。今は、「たたいま！」と帰ってくる時の笑顔で大切にしながら、あの顔で登校できる日がくることを待ちたいと思います。「人は、変わることができる」それは、大人も子どもも同じです。

可能性を信じて、努力し続ける者でありたいと思います。岩崎まり子

現場から

## のびやかに ふくよかに

## Ⅶ

笹山 恵理

春と夏の間の柔らかい色たちに囲まれる心地よいこの頃です。いかがお過ごしでしょうか？

この春新学期がはじまって以来高校一年男子たちが不安定になり夜になっても帰宅しない日が続いた。そんなある夜、担当の鷹貴を家の前の道端に座って待っていた。真冬のコートを着ていても夜はまだ寒い。時計を持たずにいると夜はとてつもなく長く感じる。時計があれば時間だけが気になり一晩外にいることは出来なかっただろう。

星が出ていれば少しは楽しい夜だっただろうが、月までも雲で隠されてしまっている。

中学の時に習ったはずの月は1時間は何度動くのかについて少し悩んでしまった。15度か？30度か？1日は24時間で360度回る。だから・・・15度くらい動くのだろうと納得してさっきあったはずの月の位置と今ある月の位置で、どのくらいの時間が経ったかを知ろうと試みたものの、どう角度を取ってよいかわからず、月から時間を推すること

を断念した。

薄く見えていた月は更に厚い雲に覆われて少々心細くなる。

「早く帰ってこい」と、声に出して自分を慰めてみたりする。景気づけにと頭の中に「帰ってこいよ」を流すと、虚しくため息が出る。

「早く帰って来い」と、もう一度声に出す。回りに何の気配もなく声だけがからんと響く。静かで意外に明るく長いながい夜。

どのくらい経っただろう、天地がひっくり返った。瞬間、何がおきたのか判らない。と、居眠り転げたことに気付く。コートに手も足も入れて座り、達磨になっていたのだ。起き上がれない。手も足も出ないでアスファルトに転がっている不様さに笑ってしまう。少し浮き世離れしていて我ながら面白い。「あっはっは」と声を出して笑い子どもとの状況を思い不謹慎が身を貫いて口を結ぶ。心を子どもにも集中させる。心配度数の低い自分に少々あきれる。うつらうつらと夜は流れていった。朝は音と共にやってくる。不意に少し離れた家から鶏の音が聞こえる。

ひとつ、またひとつ。あたりは暗いままであるが確実にやってくる朝。ほどなく土手を越える始発電車の音が聞こえる。時間が動き出し一日が動き出した。こんな風にやってくる朝を鷹貴はどこで、どんな思いで凍えながら迎えているのだろうか。心細い夜が終わる安堵を覚えているのだろうか。一晩帰らなかった自分を見つめているのだろうか？

四方からバイクの音が聞こえ出す。動いては止まり、また走り去る。新聞配達のはじまった。「おーい、本当に帰ってこないのかー」諦めが心にかぶさってくる。「待っているから帰っておいでー」。でも、声も心も届かない・・・

新聞屋さんが私の前を通り過ぎ、我が家に新聞を入れて遠ざかる。本当に朝なんだ・・・人や形がうすボンヤリとしか判らない暗さの中をふらふらと立ち上がり歩いてみる。バイクがやってきて目の前で止まった。「ほら、寒いだろ」と、缶コーヒを2本差し出して下さっている。さっきの配達の方だ。ありがたく受け取りあけて飲んだ。コーヒの香りと人の心の香り・・・暖かさが胸を心を暖めてくれた。すーと涙が頬を伝った。

「早く帰っておいでよ」と、小さ

な思いが沸き立った。

「こんなに待っているのに！」  
実のところ、『こんなに』というのはあてはまらない、と強く思えてきた。

子どもが求め、待っているものが何かも知り得ずに、ただ一夜を外で待っていただけが『こんなに』などと言われたら迷惑だろうと思えたからだ。

鷹貴が待ち求めているものを確実に知り、その質量を比べられたら、私の『こんなに』の何と貧しく微々たるものであることに違いないから。甘く温かいコーヒが心をゆるめる。『待つことも悪くないな』と思ったりして、薄情さがさらに自分を落胆させる。

でも、待つことって何か手応えのようなものを感じる。一晩だけでも帰ってこなかった子どものことだけを考えていられることの幸せを思った。

迷い、何かから逃げ出している、あるいは何かを求めているだろう鷹貴にも確実に一日がはじまっている。



## 家族 その十六『情緒15』暮らしⅡ

養護メモ 62

「なんでオレがチビどもと一緒に起きなきゃならないんだよオ！」  
「もう、ちゃんと起きなさい！」

朝六時から約三十分ほどこんなやりとりが各家の高校生と指導員や保母たちの間で繰り返されていた。子どもたちの言動をただしていくのは畢竟生活のリズムを立て直すことであることを申し合わせてこの正月を迎えた後のことであった。

いつの頃からか施設は存在悪であり、施設を必要としない社会が理想に近いものだという理論がもてはやされてきた。私にもそれにノッて騒いだ若い日があった。いわゆる施設解体論などはその典型だろう。そんな現場を無視した学者の遊技に近い論理と併せ、限りなく家庭に近づいていく暮らしを創っていくという光の子どもの家の取り組みの中に、家庭についての内容の確認もナシに「普通の家庭」というものが、それぞれ育ってきた家庭をモデルにしながらでんにすすめてきた。ふと気がついてみると、目指してきた施設形態の地域への分散と小舎による家庭的養育とは内容の違う生活にな

っていた。

学校への道のりが一番遠く徒歩通学の小学生が真っ先に起きて食事を済ませて出かけていく。その頃にやっとな中学生や高校生が起き出して来ててんでにご飯を食べ始める。学年が離れている家では三度ぐらいに朝飯が分かれて摂られていた。

そんな頃である。庄一を中心とした中・高生の夜遊びや職員の部屋へに侵入しての窃盗などが繰り返されていたの。

さて、光の子どもの家がすすめる家庭的養育についての認識が甚だしく違い、施設生悪論などの理屈に迷妄し、アブリオリにフツの家庭と同じ様な生活を目指してしまうのである。フツの家では、朝飯など一緒に食べてはいない。各人の都合によつて食べればいい、などという乱暴がまかり通るようになる。

有り体に言えば、日に三度も朝食をしている家では明らかにそれを職員が許可していたし、顧みることもしていなかった。たぶん彼らの育った家ではそうしていたのだろう。さて、光の子どもの家では、生活

を共有する規模を適正に縮小し、出来るだけ分散して居住することを目標にしていた。それは、この国の普通の生活規模になり生活そのものの社会化を果たしたかったからだ。

断じて、フツの家庭に近づけば問題が解決するなどとは考えてもいなかったのである。それらの家庭では各人の勝手や快適さなど共通する欲求を集めて生活を形成してきたと考えられる。だから、共通項が減少していくと生活を共有する場面や時間が比例して減少し、家族の関係の力が衰弱し、子どもたちが養護施設を必要とするに至ったのである。

多くの平均的な人々は異性と生活を共有することから家庭を形成し始めるのである。性は乗り越えようもなく思えるほどに存在のちがいを直接感じさせる。その違いの大きさに気付いて当惑し別離を選ぶことも希ではない。ちがうから一緒に暮らすと決心し生活を始めたことを思うべきであろう。

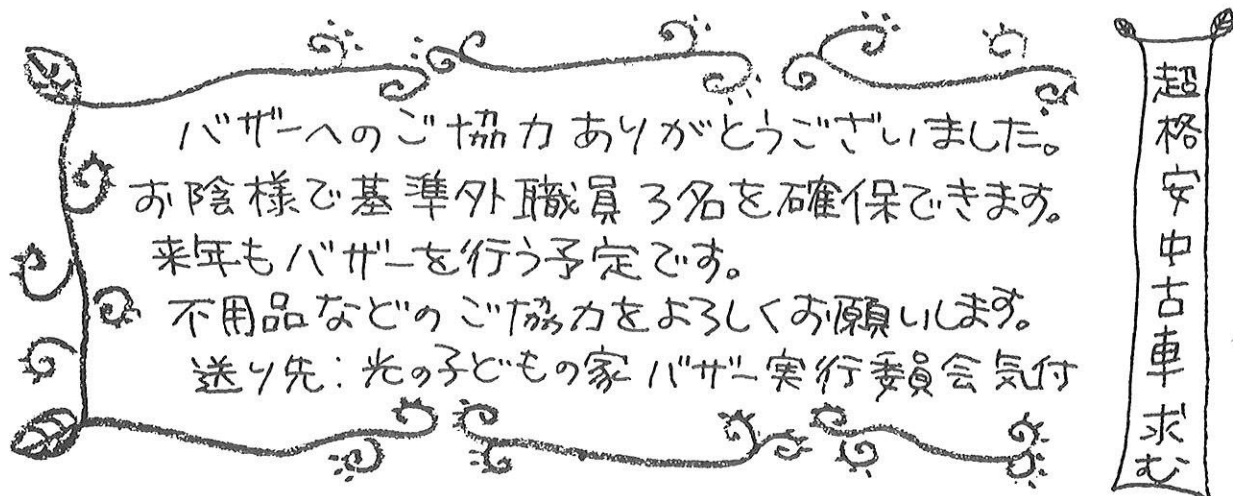
光の子どもの家の各家は高校生とよちよち歩きの幼い者までの年齢構成にしていた。高校生の勉強の時は

小さな子どもは静かにしようと心を遣う。幼い子の夜泣きなどには大きな子は心配するだろう。そんなちがいが相手への思いやりを育ててきたのだ。暮らしの意味がここにある。

自分が出来ないことを出来る者は尊敬され誇りを付与される。性のちがいはそのもつとも典型的なことだろう。大人と子どものちがいが家庭の暮らしにあるそれぞれのちがいは多様である。ちがいは決して生活の障害にはならない、いやちがいがそが生活の原点でありエネルギーなのではないだろうか。

養育の基本はその子どもの持っているちがいを尊重し促すことにある。自分の勝手を主張するわがままとのちがいを峻別しながらちがいを尊重することである。優しさや感動などの情緒はまさにこの人の持つちがいの尊重が交差する家庭から生まれ、伝えられてきたのである。

子どもたち一人一人とじっくり話し合い、小さな小学生に朝食を合わせてやることの意味から、暮らしにあるちがいの大切さを伝えて喜び合える生活の創出に力を注いでいく。



日誌抄 = 暮らしの風景 =

1996年 2月1日 ▶ 3月31日

- 2月4日 岩槻協会青年会来訪して子どもたちと遊ぶ。
- 5日 江森ヘヤーサロン散髪奉仕。
- 6日 中央児童相談所より2名来訪して情報交換と協議。
- 8日 元タカラクラブ松永氏渥美悠子へ誕生祝を。感謝。  
○宮崎県青島学園より3名来訪し見学と懇談。
- 9日 高山嬉県立騎西高校に合格。
- 10日 第45回理事会。最終補正予算案の審議と承認。
- 12日 菅野圭樹先生来訪して子ども11名と面接診断。
- 13日 県内養護施設若竹ホームより研修と見学に3名来訪。
- 14日 越谷児童相談所鈴木福祉司来訪して地域の不登校の中学三年生の相談を受け構内に転居して通学を始めている中学三年生Aについて、構内に生活させないようにと申し入れ。中学を卒業するまで対応を保留。  
○町内松本せいじ氏より布団をいただく。
- 16日 日本社会事業大学湯沢氏来訪し懇談。
- 18日 A宅訪問。相談所とのやりとりについて報告と協議。
- 20日 東京国際大学村井助教授学生2名とともに来訪。
- 23日 桶川教会高橋伝道師来訪。
- 27日 岩手県宮古市に山中兄弟の祖父母を訪問。
- 3月1日 ベルアネックスより菟藟ゼリーをたくさん。
- 2日 一柳悠子氏よりケーキをたくさんいただく。
- 4日 小林晃子の祖父母宅を訪問。高校卒業と就職の報告。
- 6日 川口乳児院を入所予定の善綿得哉の入所前面接。  
○県立高校入学試験合格発表。県立騎西高校体育科へ伊野鷹貴、県立不動岡清和高校普通科へ栖賀加津子合格。合格祝を実施。北海道乙部町に帰った山下英雄、祖母宅へ帰った城山滋も公立高校に合格。  
○共栄短期大学菊池氏、県立会津短期大学渡辺氏来訪。
- 7日 栗橋高校を福島文明が、幸手商業を小林晃子が卒業。  
○浦和児童相談所より善綿得哉の中央児童相談所より阿蘇駒深の入所依頼。
- 9日 旗井の家が卒業祝などを兼ね家族旅行を元職員松山真・淑子夫妻のご協力で馬頭温泉へ1泊。
- 15日 富士見乳児院へ遊馬久美の入所前面接。竹花保母。
- 16日 後援会がそば打ち講習会を職員のために。  
○中学卒業式。4名卒業。
- 20日 大西宅を訪問。住所の移動と今後の生活について。
- 22日 原道小学校卒業式。3名卒業。
- 23日 第46回理事会。坂巻照子保母に感謝状贈呈。
- 24日 渡辺信一氏より献品。
- 25日 中央児童相談所より阿蘇駒深(4歳)入所。
- 26日 第2回出発の会。福島文明、小林晃子を祝う。後援会役員、東大宮教会など多数の支援者が来訪。
- 27日 養護施設鐘の鳴る丘少年の家より2名来訪。
- 28日 浦和児童相談所より善綿得哉(2歳)神田保母担当。
- 31日 坂巻照子退職。福島文明、大森優子退所。

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆先ずもって発行が大幅に遅れましたことをお詫びいたします☆新環境に乗り切れなかった高校一年生たちが怠学や夜間の放浪、無断外泊、しまいには光の子どもの家始まって以来の警察のご厄介など次々の三カ月。ご迷惑をおかけした家へのお詫び、警察からのもらい下げなど一通りではないことの連続でした。☆四歳後半から十一年もの間ここで育った者たちなのでその責任を痛感させられ、思春期の心の危うさは想像をいつも超えていて、しでかされたことどもの後を追うに手一杯で、生活を共にしていたはずの子どもの後の姿さえ見ていなかった事実にも愕然ともしました☆子どもたちの不安や傷手もきつと私たちの想像を絶していることでしょう。何とかこの難関を子どもと共に乗り越えて、新しい生活の展望を開いていきたいと願います☆永野三恵氏の連載がひとまず終わりました。ありがとうございます☆新たな職員や子どもたちと私たちを共にして新たに歩を進めず☆乞う加

(哲)